

愛と平和のために戦い 続けるヒーロー

忍野扇

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは、新世界を作り出した桐生戦兔が転生し、ヒーローとなる物語

目次

プロローグ	1
桐生戦兎：オリジン	4
$\sqrt{9} \parallel 3$ 話 ベストマッチなヒーロー	8
2 の二乗 \parallel 4 話 復讐するヴィラン	13
2. 5 (6 \div 3) 話 愛と平和を守るヒーロー $\times 2$	23
4 $a \div 8 \parallel 3$ $a \parallel 6$ 話 祝え！次代の平和の象徴のバースデーを！	28
2 の3乗 $1 \parallel 7$ 話 飛び回れラビット	31
(3 $1 + 3 \times 3$) $\div 5 \parallel 8$ 話 集まるメンバー	38
1 + 1 \parallel ⑨ 話 雄英のティーチャー	44
5 : x \parallel 1 : 2 x \parallel 10 話 ビルド勢：オリジン	47
作り出されたヒーロー	53

プロローグ

俺は桐生戦兎！天才物理学者にして、愛と平和を守る仮面ライダービルドだ！先に前置きとして言っておくが、作者はビルドについて大まかな話ししか知らないの、キャラ崩壊や、本来存在しなかったスマッシュが出てくるかもしれないぞ？それでもいいなら、見てくれ！なんで知ってるか？そ、それは…天才だからだよ。天才だからズドンでバゴゴーンでズバババツ！とこういうのは分かるの。それはさておき、ビルドとして新世界を作り、万丈と一緒に生きてきたわけだが…キルバスにあのバカが負けやがったから俺たちはまた生まれ変わったんだ。それで、今は俺は俺様系の幼馴染の爆豪とナヨナヨした幼馴染の緑谷と一緒に授業を受けている。

ん？個性は？ああ…俺の個性はフルボトル。他人の個性を成分としてコピーできる。そしてその原理を軽く理解するまではそのフルボトルによる変身が出来ないんだ。ちなみにこれを理解したのは個性発現から1年が経ち、俺という人間が出来た時だ。ちなみに初めて個性を使った時はラビットヒーローミルコにあった際に握手してもらった時だ。その次は爆豪に。マルコにやった時は安定のラビットだったが、面白がって爆豪にやってみたら爆豪の個性である爆破が出てきた…つまり戦車の個性を持つ奴に

会わないと、基本フォームであるラビットタンクに変身できないんだ！

話が長い？プロローグなのに、1000文字書かないといけないこっちの身にもなれ。普段は500文字くらいなんだし。で、話を戻すが、タンクに関しては母が戦車ヒーロー見るタンクだったから問題ない。：。名前に問題があるが問題ない。ちなみに父は個性が幽体離脱だ。理解したのは、寝ている間に幽体離脱出来て、起きている間は幽体の方が寝ているらしいって事。つまり、半分寝ている状態らしい。

でだ。今は授業中なんだが、先生が進路希望の紙を全部投げた。：。いや、だめだろ。確かに大体がヒーロー科のやつとはいえ、ヒーロー科じゃない奴もいるかもしれないんだぞ？かくいう俺は雄英のサポート科とヒーロー科を同時受験するつもりだ。両方合格したら、主にヒーロー科の授業を受けて、放課後にサポート科に入り浸るつもりだ。

爆豪がいきったせいで俺と緑谷の進学先がバラしてしまった。：。まあ、これは録音する個性の奴のフルボトルを使って先生を退職させるか。

俺「緑谷をバカにした奴ら。：。同じ土俵にあがろうとすらしぬ奴らがこいつをバカにするな。それと爆豪。お前のヒーローになるという決意は凄いと思う。けどな、誰かの為に動かない奴はヒーローになってもあまり人気にはなれないぞ。それと先生、今は録音フルボトルで録音しました。職員室に持っていきます。」

先生「や、やめろ！俺の教員免許が剥奪される！」

俺「分かっててやってるんだったらそれこそ重罪だ。刑務所に行って反省してろ。」
キーンコーンカーンコーン

授業の終わりのチャイムがなった様だ。

桐生戦兎：オリジン

あの後、爆豪は俺に絡んできた。

爆豪「おい、戦兎。放課後話がある。先生には…いや、元先生には許可得た。許可
くれば戦兎の録音を取り消させるって言つてよ。」

俺「取り消す気はないぞ？」

爆豪「分かっているよ。口から出まかせだ。」

俺「なるほど、どこで話す？」

爆豪「デクとも話すつもりだ、だから三人で屋上に行くぞ。」

俺「了解。」

放課後

緑谷「で、話つて何…？」

爆豪「簡単に言うのと、俺と戦兎の戦いの審判をしろ。」

俺「なんで、お前と戦うんだよ…俺は戦闘用の個性を持つちやいないんだぞ？」

爆豪「だが、ボトルを振りやあ戦えるんだろ？だからヒーロー科になろうとした。デ
クは審判役つてもあるが、これまでの謝罪もしたいつてのがある。」

俺「謝罪、ね。確かにそれは必要だろう。けどな、謝罪して終わりではこつちが納得してもあつちが納得しないかもしれないし、また同じ事をしかねない。だから、行動で示せ。」

爆豪「だから、戦いを見せるんだ。お前の個性は成分をフルボトルに入れる事、つてだけでそのフルボトルを振るのは誰でもできるんだろ？」

俺「ああ。」

爆豪「だったらデクにも振らせればデクだつて戦えるだろ？」

俺「なるほど、夢を応援するつて事か。」

爆豪「だが、デクは今まで俺に歯向かうことはあつても、攻撃はしてこなかった…正確にはパンチの仕方とかが全て素人だったんだ。だから戦いを見せるんだ。」

俺「なるほどね。それなら戦つてやるよ。」

緑谷「なんで上から目線なの？ーかつちやんありがとう！」

俺「それじゃあ緑谷の合図で戦おう。」

爆豪「おう！」

緑谷「じゃあ…よーい！」

俺はラビットフルボトルを振る。爆豪は手に小さな爆破を見せる。

緑谷「はじめ！」

俺は爆豪の前に一瞬で出た。そのまま殴ろうとする！

だが爆豪はセンスだけはあった幼馴染。俺が出てきた事に一瞬動きは止まっていたが、ボトルを持った手で殴ろうとするのを見て、

「それを破壊すりゃあてめえは戦えねえ！」

BOOM!!

爆破を合わせてきた。だが、

「それくらいはお見通しだ！」

俺はそもそもそのボトルがラビットとは言っていないからな。ダイヤフルボトルで守れば問題ないと思ってたし。

つまり、爆破は服を焦がす程度で、俺は無傷だったのだ。

逆に——爆豪をもう片方の手の中のラビットフルボトルで殴った。

まあ、効いてないかどうかはさておきが、俺はラビットフルボトルで耳も良くなっていく。どう言う事か？商店街の方でヴィランがいるようだ。

俺「一旦ストップ！商店街の方でヴィランが暴れてる！」

爆豪「チッ！了解。」

緑谷「なんで舌打ち……？それでどうするの？」

俺「どうするも何もこれで中止したんだから見に行くだろ。すぐ解決されるだろうと

「思ってたが全然終わらないからな。捕まれ。」

二人とも俺の服を掴んだ。

俺はラビットボトルで移動した

$\sqrt{9}=3$ 話 ベストマッチなヒーロー

ラビットの力で移動した訳だが……それほど足は痛んでいない。

学校から商店街まで距離はある。だが、ボトルの中のミルコの個性は兎よりも兎らしい事が出来る。だから、本来のラビットボトルより速さが変わる。戦う時は一回振るだけでいい程だ。

話が逸れたが、商店街ではヘドロのヴィランが暴れていた。そういえば、前回も前回もこの世界の話はしてなかったな。

この世界ではパンドラボックスや、ブラッド族がいない、正確にはみた事がないだけだが、少なくとも、それらによる被害がない。

だが、個性という、下手をすればスマツシユ以上に危険な物がある。それが前回だったか前回回だったか言っていた物だ。個性は使う方は意識があるから暴走するとすれば、クローズチャージの様な闘争本能の刺激の様な感じだ。元々は中国で生まれた光り輝く赤子が始まりだったらしいが詳しいことは俺は知らない。まあ、それはさておき。

その個性を自分勝手に使い、他者に迷惑をかけるのがヴィランでそれを国に許可をもらって個性を使い退治するのがヒーローだ。

だが、今そのヒーローは動けていない。なんでも、ヘドロのヴィランが人質にしている子供の個性が燃焼する個性で植物系のヒーローが戦えず、ヴィランが流動体の為、近接は難しいらしい。しかも子供が抵抗しているせいで被害が大きく、有利な個性のヒーローがいらない為、手をこまねいているらしい。しかも、巨大化できるヒーローも狭くて動けないらしい。

正直言つて全員ヒーローを止めるべきだ。植物のヒーローは仕方ないだろう。実際植物は燃えるからな。だが、巨大化できるヒーローは通常の大きさで戦えるだろう。水を上から浴びせて鎮火させる、そして流動体のヴィランは冷やせばいい。ヴィランは凍つて人質は自身の個性で濡れていても多少は凍らないだろうしな。

俺「緑谷、爆豪。あれ、どうする？」

爆豪「俺は助けるべきだと思える。あの状態にいるのは恐らくキチい。」

おい、緑谷が答えてないな。

俺「緑谷？つてあいついない!?!？」

ヒーロー「おい！生まれ！生まれー！」

ん？騒がしいな？

見ると緑谷が走っていた。いやあいつ何やつてるんだよ？

で爆豪に止め行くぞつて言おうと思つたらあいつ、既に爆破で追いかけてた。嫌な予

感がするが……。

俺「あーもう！助けに行くしかないか！」

唐突だが、今の俺は変身できない。ハザードレベルがどれくらいか分からないし、ピルドドライブが手元にならないからだ。作り途中のものを使って何が起きるか分からないし、壊れたら作り直すのは面倒だからな。

だから、ラビットボトルで助けに行く。とはいえそれだけでは、危険だからな……爆破のボトルで攻撃を相殺する。

ヘドロ「なんだ？あいつら、燃やしてやる。」

俺「悪いがそれはさせないよ。」

BOOH!!

BOOM!!

ヘドロ「誰だ!?？せっかくの燃やすための炎を吹き飛ばした奴は!?？」

俺「それは俺だ。そんな事はさておき前見なくていいの?」

ヘドロ「んだと?」

爆豪「スタングレネード!!?」

BOOM!!

俺「だから忠告したのに。」

ヘドロ「目が、目がアアアアアアアアアア！」

緑谷「今のうちに助ける！」

グイツ

ヘドロ「せつかくの隠れ蓑が……貴様を隠れ蓑にしてやる！」

俺「悪いが見られている以上無理だし、それにお縄に着く時間だぜ？」

ヘドロ「何？」

？「君たち子供が頑張っているのに情けない！本来は私たちがヒーローがやるべきなのに！だからこそ、倒そう！DETR OIT SMASH!!」

風圧がやばい……近くに寄られたせいで風圧で吹き飛ばされそうだ。だったら……タンクボトルによる戦車の重さで！

解決後。

俺「助けてくれてありがとうございます。」

オールマイト「いやいや、吹き飛ばしてしまってすまないね！」

俺「いえ、煽った俺も悪いので。」

緑谷「オールマイト！サインください！」

オールマイト「はいはい。」

今、ヘドロを倒したこの男はオールマイト、日本のNo. 1ヒーローだ。

流石に成分は個性だからな。そりゃ、戦車自体じゃないから吹き飛ぶ。

まあ、その後俺達を叱ろうとしたヒーローには、

俺「あんたらは個性の使い方を完全に知っていない俺らが出来た事をしようとすらしなかつた。植物のヒーローは仕方ないだろう。燃えるんだから。だが、あれを冷やす事は氷なり保冷剤なりで時間はかかるだろうが出来たはずだ。それこそどんな奴でもな。それなのに助けようとすらしなかつた。ちゃんと助ける為の策を練ろうとしていたヒーローは辞めなくてもいいが、難しいからと思考を放棄していたヒーローは退職して就職サイトでも見ていた方がいいぞ？」

と言つて怒つておいた。ちなみに被害者の女とは仲が良くなり、お互い雄英に合格すると誓つた。

2の二乗Ⅱ 4話 復讐するヴィラン

あの後、俺は帰つてすぐに寝た。爆豪との勝負？逃げた。というか、また後日になった。実際終わった時にはもう暗くなっていたからな。それはさておき、学校に着いた。なんか金髪のガリガリの人が誰かを探しているのか校門の前の突き当たりで隠れていたが。まあ、教師も異形系の個性（熊）を持つ新しい人になり、新しい平和な学校生活の幕開けだ。

：： そうだったらよかったのに：： 放送室の所から流れるスピーカーにボイスチェンジャーでも使つてるのか女性の声で、

「この学校は乗っ取った。返して欲しければ桐生戦兎と緑谷出久を化学室まで連れて来い。」

と男性口調で学校占拠宣言が流れた。え、行くべき？

新しい先生「これは私が行くわ。二人ともここで待つてて。」

いや、それは危険だろ。

俺「それならこのボトルを持っていつてください。ミルコの個性の成分です。振ればとても速くなる。」

新しい先生「ありがとう。」

少し経った後

「何故か先ほど呼んだ二人ではなく、教師が三人来たが、お前ら馬鹿か？占拠したって言っただろうが、解放して欲しいならなぜ、二人を出さない？これでお前らにも効く人質ができたぜ？」

俺「緑谷、これは罠だ。恐らくこの声は前の先生が声を変える機械を使つて俺たちに復讐しようとしてる。」

緑谷「じゃあどうするの？」

俺「ラビットボトルはあれ一つじゃない。あの後寝る前にミルコに電話してみたんだ。最初の時の後にもしかしたら、プロヒーローの成分だから取ろうとする輩がいるかもしれないって言ったら電話番号を覚えてくれた。そのおかげでバックアップを取れたんだ。これをお前に渡す。恐らくあのヴィランは人質がいるからと喜んでる。だが、俺は個性を成分にする。あの先生の個性も成分に変えているから弱点はわかる。だから俺は警戒されているだろう。だが、無個性のお前なら、警戒されない。それどころか最初の時点で人質にするつもりだったんだろう。それを利用する。」

緑谷「なるほど。だったらラビットボトル以外に、何か錠の様な個性ってある？」

俺「ない。その前に、爆豪。」

爆豪「んだよ？」

俺「これを渡す。振れば一定時間その個性を扱える。中身は俺の父だ。よく考えて使え。逆に、爆豪の個性を緑谷に渡す。作戦はこうだ。俺と緑谷が、ヴィランのところに行く。当然戦闘になるだろうが、緑谷のラビットの力で助ける。それで無理なら爆豪の幽体離脱で助ける。その個性は幽体と自身の体を入れ替える事も可能だからな。その後は俺が戦う。」

爆豪「分かった。」

緑谷「うん。」

突然だが、これは表向きの作戦だ。もし、俺の考えが的中していたらそれをしようとする二人は捕まる。考えすぎだとは思うが嫌な予感がする。だから俺はミルコに電話をしたんだ。もしも危険に陥ったら、録音ボトルを振ってその時の作戦を伝えるって。録音ボトルは違うボトルからも録音した声が出てくるが、電話より少し機能が悪く、振らないとその声は聞こえない。だが、身に付ければヒーローとして体を動かす以上、それは関係がない。これで伝わったはずなので、助けてもらおうつもりだ。

化学室

化学室まで着いたが……ひとまずノックをしよう。

コンコン

「入れ。」

やっぱ後ろに隠れてたよな。

俺「入るぞ、緑谷。」

緑谷「うん。」

俺「それで、俺たちはどうしたらいい？」

「それより後ろを向け。」

俺「分かった。」

後ろを向くとそこには……新しい担任がいた。

緑谷「なんで?!？」

俺「悪い予感が当たったか……最悪だ。だが、俺の勝ちだよ。」

新しい担任「ほう? そうなのか?」

俺「ミルコに連絡したからな。」

新しい担任「悪いが監視カメラから見ている。そんなハツタリは通用しないぞ?」

俺「どっちでもいい。あんたら四人の共同か? それとも三人? いや、一人か?」

新しい担任「何故、二人だと思わない?」

俺「少なくとも、あの先生は、教師免許を剥奪されただろう。だから、ここには一人の手引きがあっても、入らないはずだ。少なくとも二人の協力が有れば可能になる。だ

が、あの先生から何か吹き込まれて俺たちに危害を加えようとあんた一人で考えているかもしれない。その際に他の先生二人が止めようとして逆に丸め込まれて三人になったかもしれない。あの先生のために三人であの先生を入れて、四人で企てたものかもしれないからな。まあ、二人の可能性は最も低いと考えただけだ。」

緑谷「なんで教えてくれなかったの？」

俺「監視カメラから音声を聴かれるかもしれないなかったからな。一人でどうにかしようと思った。」

緑谷「じゃあ!!？」

俺「ああ、対抗策はある。立て籠もりについてはもう二人のヒーローにバレてるはずだし……爆豪は俺の意図を汲み取って他のところを探してくれてるだろうしな。」

プルルルプルルル

電話だ。

俺「なんだ？」

爆豪「他の先生二人もヴィランだった様だ。」

俺「なるほど、予想通りだ。爆豪は個性で逃げる。俺の考えが正しければ、その二人は事務の人間だ。個性は分からない。」

爆豪「確かに事務のやつだ。逃げる。」

新しい担任「何故事務だと思った？」

俺「俺たちに敵意向けているのはその二人だからな。」

かたや、問題を起こす実験中毒者（そう思われている）

かたや、いつまでも夢を見続けるみっともない子供

そりやあ個性があつても夢を掴み取れず、しかも事務仕事を増やされば、俺たちに敵意を向けるのは当たり前だよなあ？

俺「緑谷、俺からヒーローの先輩としてアドバイスだ。」

緑谷「何？」

俺「見返りを求めたらそれは正義とは言えないし、もし私怨に塗れたら、それこそ正義ではない。だからこそ、間違えても、こうなつた原因を恨むな。」

緑谷「え？」

俺「あの夜に寝る前に作り途中のものを作り終えたんだ。新しい担任の個性は異形系、それも動物、あの時の少女に成分をもらつておいて良かった。」

新しい担任「何を言っている？」

俺「俺の個性にあつた武器だ。ドリルスラッシャーは危険だからな。ビートクロウザーで戦う。」

新しい担任「勝てるだけでも？」

俺「ああ。それとー緑谷、あっちを相手してやれ。」

緑谷「うん！」

俺「まあ、その必要は無いだろうが。」

緑谷「え？」

爆豪「チツ！化学室まで誘き寄せられたか。」

事務1「袋の鼠だな。問題児三名。」

俺「まだ上があるけどな。」

事務2「悪いけど上は私の個性の操鉄で塞いだ。」

俺「鉄を壊すヒーローがいなくても限らないけどな。」

前の担任「何？まだヒーローが来ると思っているのか？問題児。」

俺「問題なのはあんただけどな。」

バギイイ！！？

ミルコ「あー痛て、なんでこの学校、鉄で塞がれてんだ？」

俺「ヴィランが籠城を完璧にするためらしいですよ？」

ミルコ「そうか。まあ、いい。おーい、オールマイトー！こっち開いたぞー！」

前の担任「オールマイトだと？そんな一度ならず二度までもそいつらを助けるために

来ると思うか？」

俺「なんか見覚えあると思ったらオールマイトか。いや、体が違ってたが……エボルトの様なものか。」

緑谷「エボルトって誰？」

俺「都合が悪い時は味方面する星の破壊者だよ。多分ここにはいないだろうが。」

オールマイト「私が来たー！いやあ、また君達か。今回は何があったんだい？」

俺「前の担任の逆恨み及び事務の先生の八つ当たり。」

事務1「いや、八つ当たりでは無いぞ?!?お前らが悪いんだから八つ当たりじゃ無い!!?」

オールマイト「……何をしたんだい？」

俺「実験しまくって化学室の崩壊が2回。教室が焦げたのが、53回ほど。」

オールマイト「それは……暴動を起こす事務も事務だが君も君だよ？」

事務2「私はそれもあるけど、そっちの子供はもどかしい。」

俺「あー、なりたいたいと言っているだけで努力しないから、ってことか？」

事務2「そう。だから、わざと悪役を買って出た。」

俺「いや、どこのヤンデレだよ。」

緑谷「ヤンデレは違うと思うよ?!?」

事務2「ハア、どうせ捕まるだろうから先に言っておく。緑谷くん、君は私たちと違っ

て心はとても綺麗。だけど、個性がないからヒーローになるのは難しい。けど鍛えれば可能性は少ないけどある。だから努力をしなさい。」

オールマイト「女性の事務の方は私から罰として君の先生をしてもらう様に言っておこう。」

俺「なんでだ？」

オールマイト「個性無断使用はいけませんが、生憎ここは学校。それも閉ざされていたからそれを見たものは少ない。だからそれを口封じればいい。とはいえ、目には見えなくても悪いことをしたしその自覚があるのだから罰は与えられるべきだ。だから、君の運動の先生をしてもらうのはどうかと思つてね。」

事務1「俺は!?？」

オールマイト&mp;俺「君は／お前は」、だめだろ。」

事務1「シヨボーン。」

いや悪いのあんただから。

ミルコ「担任二人は問答無用で捕まえる！」

事件後

俺「あー疲れた。」

ミルコ「そうだなー！けどナイス判断！情報が少ない中よく、正しい判断が出来たな！」

緑谷「教えてくれなかった理由は分かっただけど、多少はヒントをくれる？」

俺「まあ、それがなくても爆豪は分かってたから。」

オールマイト「それもそうだがボーーーーー!!し、しまった!」

やっぱ縮んでる。

ミルコ「オールマイト?!?なんだよ!?!その姿www!」

オールマイト「ミルコ!周りには言わないでくれ!?!」

ミルコ「分かったよwwwwヒー腹痛ーwww。」

2. 5 (6 ÷ 3) 話 愛と平和を守るヒーロー×2

さて、ひとまず、目の前で起こったことを話すでしょう。俺の目の前では俺たちを助けてくれたNo. 1ヒーローがいたんだが、一瞬で煙がモクモクと出て、物理法則を無視して縮んでいる。

俺「どういうことだ?というか、オールマイトで合ってるよな?」

オールマイト「ああ、私はオールマイトさ。よくプールで腹筋が力み続けている人がいるだろう?あれさ。」

緑谷「ウソダー!!?」

ウソダドンドゴドーン!!?

なんか出たな?そんな事はさておいて、爆豪は喋ってないが…気絶してるな。まあ、いいか。

俺「で、なんで、そんな状態になってるんだ?どこか怪我してるのか?」

オールマイト「5年前に負わされた怪我があつてね。それがなくても、これが私の本来の姿さ!」

ミルコ「5年前?なんかあつたっけ?」

緑谷「毒々チエンソーによってつけられたんですか？」

オールマイト「詳しいね！だが、あんなチンピラにやられはしないさ！」

俺「多分だが、公表されてないんじゃないか？オールマイトは曲がりなりにもN.O. 1ヒーロー、弱っている姿を見せればヴィランが活気付く、そのヴィランを助けようと思う。だから公表しない、とかじゃないか？」

オールマイト「桐生少年は賢いね！その通りさ！だがそいつは、私が紙一重で殺したからね、助ける事は不可能さ。」

俺「本当に殺したのか？亡骸は火葬したのか？」

エポルトも倒しても倒せてなかったからな。

オールマイト「いや、火葬はしてないが…まさか。」

俺「そのまさかはあり得るかもしれないな。それはさておいて、どんな傷なんだ？」

オールマイト「呼吸器官半壊、胃袋全摘、私のヒーローとしての活動時間が1日三時間となつてしまっている。」

緑谷「オールマイトが…そんな怪我を…？」

俺「ありえない話じゃないな。それにしてもそいつは強すぎるが。」

オールマイト「ああ、私のヒーローとしての師匠もそいつに殺されてしまった…」
ミルコ「オールマイトにも師匠はいたんだな…」

暗いな。それでいて、辛い話だ。

俺「それで？ここまで話すつて事は何かしら俺たちに要求するものがあるんじゃないのか？」

緑谷「戦兎くん!!？」

俺「同情を誘うだけなら俺は帰る。あんたは弱みを見せたくないんだろ？なら何故俺たちに話した？要求があるなら飲むぞ。」

オールマイト「H H H A、厳しいね。まあ、要求と言うほどでもないさ。それにみられた以上は話すしかないだろう？」

俺「ほどでもない、と言う事は何かあるつてことだな。」

オールマイト「緑谷少年にね。ヘドロヴィランの時、君たちの中で最初に出たのは緑谷少年だった、だろ？」

俺「そうだな。作戦会議をしようとしたら無視して飛び出して行った。だからか？」

緑谷「え、え？どう言う事？」

俺「どうせ、あんたの後継に選ばれたから話したつて言いたいんだろ？そいつは無個性だ。これまでそんな重圧に晒される事はなかった。」

だからやめておいてやれ。」

オールマイト「惜しいね！後継に選びたいというのは正解さ！それと君たち、プロ

ヒーローはいくつか逸話を残すものもいる。彼らは揃って言った。

『体が動いていた』

と、ね。緑谷少年もそうだったんじゃないか？

緑谷「っ！……はい……！」

オールマイト「だから、後継に選ばうと思った。それにだ。君なら私の個性を渡してもいいと思った！」

爆豪「個性を」

ミルコ「渡すだって!? ポケてんのか？ オールマイト！ 個性なんて渡すことできねえだろ！」

俺「恐らくだが、そう言う個性なんじゃないか？ ただ渡すだけ、ではなく、力を譲渡する個性。」

オールマイト「正解さ。私の個性はONE・FOR・ALLという、個性を譲渡し、また違うものへと譲渡し、力を紡いでいく個性。それを、緑谷少年なら受け取ってくれると思っている。もちろん君の意思を尊重するがね。」

緑谷「お願いします！」

次の日

緑谷「で……なんで、この海浜公園に？」

オールマイト「君の体は多少なりとも鍛えられている。だけど、まだ個性を受け取れる器じゃない。だからその器を完成させる為の運動として、と言うのが」

俺「第二の理由、だろ？」

オールマイト「そう言うことさ！第一の理由は分かるかい？」

俺「奉仕活動、か？」

オールマイト「正解さ！やはり君はどこか大人びてるね！というより、ヒーローらしい！」

緑谷「そういうえばヒーローの先輩としてアドバイスって言ってたけど……」

俺「悪いがそれは秘密だ。変に話しても混乱させるだけだからな。きちんと話せるようになったら話してやる。」

4 a ÷ 8 = 3 a = 6 話 祝え!次代の平和の象徴のバースデーを!

それから、色々あった。緑谷が色々な漂流物及び捨てられたものを片付けている間に、俺はヘドロの時に助けていた女の子と話をしたり、ミルコと二人で戦って稽古をつけてもらったりもした。秋には緑谷が、オーバーワークで倒れたりもした。ん?女の子との話?ああ、そんな充実したもんじゃねえよ。あいつの炎の色がクローズの炎の色に酷似してたからな。あいつの名前は、万丈龍虎、この字が違うだろう?あつてるんだよな... この漢字で女だ。それに、助けた時も、ヘドロによってなのか知らんが、パンツが丸見えだった(あいつの名誉の為に言っておくが、パンツの色は知らんし、ジーンズを着てたからな、一部だけだ。)し、あいつと酷似しすぎなんだよな... まあ、いいか。その後、無事緑谷は、器になった。とはいえ、まだ仮だからどうなるかわからないが。あの時の事務の人...あの後名前を初めて聞いたが、操鉄美空だった。

美空は

『個性は体の一部だけど、貴方の場合馴染むのにも時間がかかるから、あまり本気で使おうとしないでね、多分オールマイイト並の力は体が壊れるから。』

と言った。

まあ、確かに、ビルドもハザードレベルに合っていないと変身できないしクロージチャージは出来たとしても副作用があつたからな。

あ、それと、新しい担任も古い担任も危険だったため、うちのクラスは担任が来る時に戦々恐々としてた。新しい担任の名前は、内海蝙蝠だった……もう分かるよな？俺の言いたいこと。作者ア！変にラッシュユカますな！離れていく人が増えるだろうがア！なんかネタバレ言いそうだからもうやめておこう。それはさておき、いま俺は雄英高校の前にいる。雄英受験の為だ。

まずはサポート科の受験なので行ってみただが……隣の人の言ってる事が怖い。プレゼン力を探る為の集団面接中なのだが、隣の人は

『私のどっかわべいビーをヒーローの方々に使ってもらいたいです！改善点があつたらその都度直すつもりですし、失敗しない様に、ここで勉強するつもりです！』

べいビーは多分こいつの作った機械なんだろうな。まあ、それにしてももう少し言いかたを変えて欲しいが。

俺の番が来た。

俺「俺はヒーロー科も受験しているのですが、基本的にヒーロー科にいて放課後はサポート科に入るつもりです。理由としては、ヒーロー科で他の生徒の個性を知りそれに

合ったサポートアイテムを作る為です。

それに、俺の個性は個性をコピーする個性、その個性に合ったサポートアイテムは作りやすい。だから、サポート科とヒーロー科を受験しました。」

俺の結果はヒーロー科の結果とともに送るらしい。他の奴らの結果は翌日に貼っておくらしいが。こっちの方が無駄が無いだろうと言う事らしい。次はヒーロー科の受験だが、筆記は問題なかった。龍虎は俺が教えていたのもあって、少し躓いたらしいが、恐らく合格らしい。

それで次は実技試験だ。

2の3乗ー1||7話 飛び回れラビッツ

俺は今実技試験の説明を受ける場所にいる。

プレゼント・マイク「今日は俺のライブにようこそー!!?!」

エヴィバディセイヘイ!!?!」

龍虎「ヨーコソー！」

他の人「:..」

あいつ、やっぱり万丈だろ。

プレゼント・マイク「そのリスナーサンキューな！それと、実技試験の概要をサクッとプレゼンするぜ!!?アーユーレディ!!?」

龍虎「イエーロー!!」

そこはダメです！じゃないのかよ。いや、いいけど。

説明がひと段落したところで、質問タイムになった。

「プリントには四種のヴィランが記載されております！誤載であれば日本最高峰たる雄英において恥ずべき痴態!!?我々受験者は規範となるヒーローのご指導を求めてこの場に座しているのです!!?」

真面目くんだねえ。

4体目についての説明が終わり、出る時になったが、

プレゼント・マイク「plus ultra!! それでは皆様良い受難を。」

試験会場

試験会場広いな……これだけの広さを作るなら、費用も馬鹿にならないはずだ。いや、個性で作っているから費用は削減されているのか？まあ、いいか。つて、あの馬鹿いるじゃん。

「ハイ、スタート！」

ダッ！

やっぱいきなりか！ラビットボトルを振って！

一ポイント「目標発見、ブツコロス！」

俺「出来るんだっいたらやってみろ！」

回り込んで後ろから殴る！

ドゴオ！

案外脆いな。とはいえ、まだ始まったばかり、気を抜かずにいくとしよう。

三ポイント「まる焦げにしてやるよ！」

俺「やれるもんならな。」

もう一度回り込んで、今度はダイヤモンドボトルを振って！
バギイ！

ちなみにダイヤモンドボトルはなんか寝転がってたヤクザの奴に個性の説明したら許可くれた。なんでも、個性が水晶を作り出すのか、体を水晶にするのか知りたかったらしい。実際は後者だった様だが。

あれから20分後

まだ終わらないのか。少し疲れるな。まあ、問題ないが。

ゴゴゴゴゴ

ん？なんか地面が揺れているな…。下からなんか出てくんのか!?!?

俺「オワア!?!」

あ、多分高度20mくらいの所にいるわ。降りれないな…。ドリルスラッシャーで、ぶっ刺しっつ降りるか。

ガギギギギ！ガイン！

やっぱ途中で外れますよねー！くそ！こうなったら、一か八かゴリラフルボトルをドリルスラッシャーに挿して振るってその勢いで速度を緩和するか！

ブオン！

よし、着地できた！ひとまず、怪我人を逃すか！

あそこに誰かいるな！足元は危険だから、早く逃すか！

俺「おい！大丈夫か？」

「足を挫いた。全然立てない…私の事はいいから早くポイントを稼ぎな！」

俺「困っている奴を放っておいてヒーローになれるかっての！」

バガツ！

俺「瓦礫割つたし、掴まれ！」

「う、うん。」

ラビットボトルを振って逃げる！

「早!!？」

俺「こうやって一人一人助けっていると面倒だから0ポイントを倒しに行く。倒したい

奴は手伝え！」

タンクボトルをドリルスラッシャーに挿して、銃モードに変える！その上で撃つ！

ボトルテックブレイク！

ドオーン!!

全然効いてないな…近くで大技ぶつ放せば変わるか？

ラビットボトルを振って近づいて、ミルコさん直伝の必殺技を当てる！

俺「ルナ・フオール！」

バゴオオオオオーン！

ちなみに足はダイヤフルボトルで硬くしてたので問題ない。結果は大破。とはいえ、着地を考えてなかったな。どうするか…:

「えい！」

ガシッ！

なんか大きい手に掴まれてるな。

「着地考えてなかったの？頭かいてたけど。」

俺「ああ、武器を置いてたから。というか足大丈夫なのか？」

「飛ばしてもらっただけだから大丈夫。」

俺「そうじゃなくて着地。」

「…あ。」

おい!?？結局振り出しじゃねーか!??

俺「…どうするよ?」

「ボトルだっけ?あれでどうにかなんない?」

俺「空中で使えるボトルがない。」

「…どうすんの。」

俺「俺が聞きてーよ。最悪だ…。」

龍虎「いや、武器見て思い出せたから最高だよ！」

俺「ん？今の声は馬鹿か！」

龍虎「誰が馬鹿よ!!？ひとまず龍牙、マグマ使えない？」

龍虎「無理だつての！暑くてあいつらが火傷する！」

なんか一人二役やってるな……つてか龍牙？

俺「万丈か!!？」

龍虎「どつちも万丈だ！おい、着地を受け止めりやどうにかなるんじゃないか？ゴリラフルボトル落ちてたわけだしよ。」

龍虎「それ採用！着地点に移動する！」

ヒュウウウウウーゴギイ！

俺「なんかなつちやいけない音したな？万丈大丈夫か？」

龍虎「文字の羅列がヤベェ！」

俺「あ、龍牙の方だ。」

龍虎「なんかあんたの武器見たら記憶思い出して、結果こうなった。」

俺「多重人格か：．お前らの中にエボルトはいるのか？」

龍虎「知らねえよ。あいつこの世界にいるのか？」

俺「それこそ知らないよ。俺に聞くな。」

「で、結局大丈夫なの？ 万丈龍牙さん？」

龍虎「本名は龍虎！ で、多分手が折れてる。ゴリラフルボトル振ってたから片手でしか受けられなかったし。」

「しゅーりょー！ ！」

一同「あつ。」

(31 + 3 × 3) ÷ 5 = 8話 集まるメンバー

終了した後、俺らは別々に帰った。

連絡は、発表があつたらしようとお互いに決めた。

そして試験が終わり数日が過ぎた頃に、発表が来た為、電話でお互いに開けようと思つた。

俺「それじゃ開けるぞ？」

龍虎「おう！」

「私がー！投影されたー！」

お、オールマイトじゃん。

龍虎「オールマイト?!?嘘、ほんとに?!?」

「驚いてるね? 私は今年から雄英で教職に就くことになったんだ! ちなみにこれは夢じゃないぞ!」

普通に会う事があるから夢じゃないのは分かる。

龍虎「誰だ? この金髪だるま?」

俺「万丈、こいつはこの世界の日本のNo. 1ヒーローのオールマイトって奴だ。」

俺は諸事情あつて普通に会う事が多いがな。」

龍虎「オールマイトに会う事が多いの!? いいなー!」

俺「会いたいなら一緒に来い。バカにも教える事ができるからちよいどいい。」

龍虎「誰がバカよ!?」

俺「お前じゃない。万丈だ。」

龍虎「どっちも万丈よ! / 万丈だ!」

俺「龍牙の方を万丈と呼んで、龍虎の方を龍虎つて読んだ方がいいか?」

龍虎「それがいいわね。 / いつも通りになるしいいか。」

ー 夜 ー

俺はあの時に、合格発表と同時に秘密を知る者で集まろうと秘密裏に連絡された為、龍虎と一緒に来た。

オールマイト「ムムツ!? 君ならあの話が分かるだろうと思つたが、誰だい? その女の子は?」

俺「俺の友人で俺と同じ秘密を抱えてる奴だ。と言つても、こいつの場合、二重人格になつてるけどな。」

オールマイト「二重人格…!? そうなのかい? 少女。」

龍虎「オールマイトじゃないじゃん！／＼、こいつがNo. 1ヒーローなのか？」

オールマイト「・・・ドウイウコト？」

俺「片方は俺と同じ奴。もう片方はヒーロー社会に生きてた奴。って状況だ。」

龍虎「戦兎！オールマイトに会えるんじゃないの!!？」

俺「幻滅させて悪いが、あれがオールマイトの本来の姿だ。本人曰く、いつもの姿はプールで腹筋を硬くしまくっている様なあれらしい。」

龍虎「それはそれで凄えな!!？」

俺「ま、確かにそうだ。」

龍虎「・・・う、嘘だ。」

オールマイト「・・・戦兎少年は伝えるべきだと思つたのかい？」

俺「正確には会いたって言ったからな。勝手についてきた。」

オールマイト「ハァー、まあ、いいが。今度からは付き纏われたら逃げるんだよ？」

俺「はい。」

オールマイト「さて、少女、あー、名前はなんて言うんだい？」

龍虎「あの姿を見せない限り、私はあなたをオールマイトとは認めない!!？」

オールマイト「oh・・・怖いね。まあ、見せてもいいが、周りの目があるから怖いね・・・」

俺「見せないと話が進まないぞ？」

オールマイト「分かったよ……ボン！これでいいかい？」

龍虎「ほ……本物……!?嘘、本当に!?？」

オールマイト「それで名前は？」

龍虎「万丈龍虎よ。」

俺「もう一つの人格は万丈龍牙って言うんだ。」

龍虎「おい！勝手に人の紹介してんじゃねえよ！」

俺「うるさいよ。ズボンのチャック全開の殺人犯。」

龍虎「え!?？ほんとに空いてる!?？いつから気づいてたの？」

俺「お前らを見た時から2，3分後。」

龍虎「ほとんど最初じゃねえか!?つか、俺は殺しも脱走もしてねえ！それは分かっているだろ！」

俺「揶揄うために言ってるだけだよ。真に受けんなよ、バカ。」

龍虎「誰がバカだ！せめて筋肉つけろ！」

龍虎「万丈、突っ込むところそこじゃない。」

オールマイト「あー……いいかい？」

俺&mp;龍虎「ウイッス／はい！」

オールマイト「まず、私のこの姿だが、秘密にしていってくれ。この怪我也だ。」

龍虎「ヒツ!? / なんだ? その傷?」

俺「胃袋全部外に出したらしい。まともな奴だったらさっきの龍虎みたいな反応になるけどな。」

オールマイト「それで、これから話す事も秘密にしてくれ。これはバレればこの日本の平和が瓦解しかねない。」

そこからOFAについての話を受けた。その後の2人の反応は……!

龍虎「そんな事があつたのか…… / 個性を譲渡する個性…… バレたら全員がオールマイト並の力を得る為に暴動を起こしかねない。」

龍虎はよく分かつてるな。万丈は…… 気にしたら負けだ。

オールマイト「そして、私はOFAを緑谷少年に譲渡した。だから彼を育ててるんだよ。」

操鉄「ん? あなたは?」

遅れてきた奴が来た。

龍虎「万丈龍虎です! / 万丈龍牙だ!」

操鉄「万丈……? アツ。」

オールマイト「どうしたんだい!?? 操鉄さん!」

俺「なるほど、そんな感じに思い出してくるのか？それとも……。」

操鉄「万丈！あんた、何負けてんの!!?」

龍虎「その言い方……もしかして美空か!!?」

操鉄「あなた、誰ですか？」

オールマイト「元に……戻った？」

操鉄「いえ、先程私の体で喋った方に聞いているのですが…… / 私は石動美空！みんなのアイドル！みーたんだよ♡!」

俺「いや、何言ってるんだよ。」

操鉄「だって、こうしないと2人とも分かんないでしょ！ってか万丈女になっちゃったの!!?」

龍虎「龍牙と同じ様な人が増えたー!!?」

操鉄「ん？もしかして万丈も二重人格になった感じ？」

俺「俺は違うが、バカはそうらしいな。」

龍虎「だから筋肉つけろ！」

1 + 1 = ⑨話 雄英のティーチャー

「初日から除籍なんて理不尽すぎる！いや、初日じゃなくても理不尽ですよ!」

…いきなりなんだ、と思っっているだろうな。今、俺は、いや、俺たち一年A組は、理不尽な苦境に立たされていた。理由は入学してすぐに遡る。

俺達ビルドの転生者はあの後、揃って内海蝙蝠先生のところに行つた。理由はあの人も転生者だと思つたからだ。だが、予想と反して、記憶が戻らなかつた。理由は可能性として転生者ではない、か、エボルトや難波会長に会わないと記憶が戻らない、かのどちらかだと思つている。

まあ、それは置いておこう。考えても両方とも俺達にどうにか出来る問題じゃないしな。その後は、特に何もせず、何も起こらず、雄英に入学した。

入つた瞬間に、爆豪君が何処のヤクザだよ、つて思うくらいに暴言を吐いていた。

俺「よっ！爆豪。」

爆豪「ああ？戦兔じゃねえか、ぶつ殺してやんよ。」

「ぶっ！…君酷いな？！？本当にヒーロー志望なのかい？！？」

俺「こいつはこうやって構って欲しいだけのかまちよなヒーロー志望なんだよ。この前だつて構って欲しいが為に虐めていた事をワンワン泣いて謝るもんだから、虐められていた側と心優しい俺は一緒に許したんだ。」

爆豪「泣いてねえし！」

龍虎「こいつ、こういう所あるからな。全員振り落とされんなよ？」

龍虎「で、あんた誰？」

「ム？これは失礼した！ポ……俺は私立聡明中学出身飯田天哉だ。」

俺「飯田くんか、よろしくな。俺はヒーロー科とサポート科に入る折寺中学出身の桐生戦兎だ。」

飯田「二つの科に入ることが可能なのかい？いや、そういう個性なのか？」

俺「単にヒーロー科の授業を主に受けて、作りたいものをサポート科で作るだけだから、実際にはヒーロー科所属のサポート科に入り浸る

てえんさい物理学者って事だよ。」

龍虎「私は万丈龍虎、訳あって二重人格で、

もう一つの人格の名前が／自分でさせる！俺は万丈龍牙！プロテインの貴公子、万丈龍牙だ！」

俺「うっさいよ、筋肉バカ、それより、先生が来るかもだから、先に座ろう。」

「お、既に全員座っていたか、いいね、時間の大切さをよく知っている。とても合理的だ。俺は相澤。このクラスの担任だ。副担任として、何故かつけられた、元折寺中学の事務だった」

美空「操鉄美空です。よろしくお願いします／あ、戦兔と万丈だー！2人ともA組だったんだね。」

相澤「この様に、二重人格になってしまった為、精神の安定のためにこの学校にいらしい。それと、もう一つの人格の名前は、石動美空というらしい。みんな仲良くしてやれ。それはさておき。」

なんか服の中ゴソゴソしてるな。

相澤「全員これ着て、グラウンドに集まれ。」

そして、今に至る。え？除籍はどうした？

それは、全員がお手本として、美空が見せた2073mという記録に面白いと言ったからだ。まあ、ヒーローとして活動するなら、理不尽は普通にあるからな。目の前で人が死に、仲間が命を散らし、一般人が利用されたり…。流星にスカイウォールはこの世界には作られないだろうが。

まあ、理不尽でもやるしかないからな。やるなら全力で、だ。

5 : X || 1 : 2 X || 1 0 話 ビルド勢 : オリジン

最初の種目は50m走、俺は口田という奴と一緒に走った。

俺はラビットボトルを振っていた為、記録は0・57秒。口田は、走る為の個性ではない様で、7・64秒。

「一秒切ったー!?? どういう個性だよお前!??」

「俺は相手の個性をコピーして成分にする個性だ。」

「えつと...?」

「俺は桐生戦兎、てっんさいぶっ「はいはい、他の競技に行く。ごめんね、切島君、こいつ、自称天才物理学者だから。」自称じゃないよ。事実だよ。」

「免許は?」

「これから取る。」

「自称じゃん。」

「お前ら、知り合いだったのか? いや、桐生も折寺中学出身だったな。そりゃ知り合いでも不思議ではないか。よし、桐生、そんな個性があるんだ。お前は総合成績一位にならないと除籍な。」

「理不尽でしょうが!? まあ、それが世の中つてもものだけどさ。」
という訳で、一位取らないといけなくなった。

戦兔が脅された後、私も走った。隣には緑谷くんがいた。戦兔の幼馴染らしいけど個性は知らない。けど、最初に見た時と違って筋肉がついているから、個性を使わなくても戦える様になっているのだろう。

「緑谷くん、負けないよ? / 負けねえぞ!」

龍牙、出て来ないで。

(いいじゃねえか。戦兔が頑張ってたんだ! 俺達も頑張るぞ!)

熱いの嫌なんだけど...

「ぼ、僕もだよ!」

START!

開始の瞬間に溜めていたマグマを噴出! 頭の後ろら辺だったら緑谷くんにも飛ばないから、そこに飛ばす!

記録は、1. 24秒:。戦兔、早くない?

緑谷くんは4. 72秒とまずまずの結果。というか走る時稲妻出てたけどどういう個性?

「もうあなたに関しては問題を起こさまくってたから驚かない。」

「あ、さいですか。」

私も握力を測ったけど、これに関しては体温を上げれば、運動能力をあげる事ができるんじゃない、と思つてやってみたら、100kgとまずまずの成績

「「いや、まずまずではねえだろ!?」「」

「そう? / そうか?」

「もうお前ら二人に関しては気にしない方がいい気がする。」

醤油顔の彼にそう言われたけど、少し失礼なつて思う。

次は走り幅跳び: : . . . なんだが、爆破を駆使すれば1日くらい耐えられそう。

それを相澤先生に申告したところ、15分耐えれたら無限にされるらしい。: : . . . 結果

? 無限です。

もう誰も驚かなくなつてた。というか、誰もが現実逃避していた。

私の番だけ: : . . . こつちも炎を駆使すれば1日耐えられるんだよね: : . . .

結果? 無限ですよー。

赤と白の髪の少年だけは、こっちに敵意を剥き出した。炎が憎いのかな？

次はボール投げ。

爆破とゴリラ、それと麗日の無重力で、簡単に無限を出した。ちなみに表向きは爆破とゴリラだけだ。その二つで無重力を隠してたからな。

マグマによる熱膨張で破壊。

計測不能というまさかの事態に！

ちなみにこれは無限よりは低いけど、どんな整数よりも高いらしい。
やったね。

その他諸々あったけど、色々作るのは面倒だから書くのやめた

作者がサボりやがった。

総合成績？

俺が一位で、万丈と龍虎が二位。それ以外は原作と同じだ。

あ、緑谷は十位くらいだったな。まあ、それよりも下は一位ずつ下がっていた。

ちなみに最下位の除籍は嘘だったらしい。∴
最下位の、って事は俺に関しては除籍
にする気満々って事じゃん!!?
いやー、危なかったー。

作り出されたヒーロー

次の日の午前中はそれほど奇抜な授業はなかった。やはり昨日が特殊過ぎただけだろう。プロヒーローが授業を行うだけでそれほどおかしな事はなかった。多分全員が普通だ・・・と思ってるだろうな。

昼はランチラッシュの作った者を食べるんだけど、これがもう絶品でやみつきになる。ちなみに、私は操鉄先生と一緒にチャーハンを食べているんだけど、ニンニクの味と醤油の香ばしさが本当に素晴らしいんだよ！

あ、私と龍牙は同じ体だけど食べる物は別々だ。だってこいつカップラーメンにプロテインかけるんだよ!!? どんな味覚バカでもこれはしないとと思うんだけど！

美空さんは、「龍牙だから・・・」で納得してたけど、納得できないよ！

午後はヒーロー基礎学というこの世界特有の教科をする。

「わーたーしーがー!」

「キッ」

「普通にドアから来たー!」

確かシルバーエイジだったか?のコスチュームを着てオールマイトが授業をする為に来た。まあ周りが色々興奮しているが俺はよく分からない。だってビルドが余り興奮とかされなかったのにオールマイトは興奮されるってなんなの!??… と思ったがビルドは兵器と思われていた時代があつたからな。仕方ない。

そう思っている間にヒーロー基礎学に関する説明が終わり、今回やる授業の内容について話そうとした。

「今日の訓練は… 戦闘訓練だ!」

「戦闘…」

「訓練…!」

ほらそこ被せなくていいから。さっさと移動するよー。

今回の訓練では自分がサポートアイテムを作る会社をお願いして作ってもらったヒーローコスチュームを着て、やる様だ。

まあ、俺は私服で行くつもりだが。龍虎も私服で問題ない可能性はある。

ここでコスチューム紹介。

戦兎くんのコスチュームはいつものなんか茶色いコートとかの私服です。

龍虎さんのコスチュームは基本的に万丈の服装だけど、全部耐火性能が良かったり、腕にはマグマを貯めて一気に放出する小さな籠手が付いている。とはいえ、服に隠れているけど。

今回の訓練はチームで行うらしく、2:2の室内戦を想定しているらしいが…おい。2人だぞ。

「先生！2:2でやった場合、どこか二人余ります！」

「ムムツ、た、たしかに。」

忘れてたのか？まさか、オールマイト…バカだな！

(そういうこと言わない)

悪い悪い。

ひとまずくじを引いたんだが、俺たちと戦兔がペアらしい。

で、どうなるんだろうな？

「ひとまず、最後に二人余るまで、普通に訓練をして、その後、余った二人組は終わった相手と戦うか、一対一で戦うか決めてもらおう！」